

時事新報定價

有様を評すれば造酒用の米は、怡も其需要を半減以上にしたるに新田を開拓して賣つる所は新米ばかりで更に酒

傾あるに於ては農民は疲弊せさらんと欲と雖も勢ひこれを免る可らず然らば則ち如何にして農家の富裕と

智に富むとは云  
日本人の偏屈あ

有様を評すれば造酒用の米は恰も其需要を半減以上とするに新田を開拓して獲る所は新米は知て更に百萬石を増加したるの姿なるが故にこれに造酒用の消費に減じたる三百萬石を合計すれば大數八百萬石は經濟學に謂ふ所のオーヴアプロダクションと爲り、供給過きて需要之に應せざるの處はなかる可きや右の外尙ほは米を消費するの道は潤滑焼酎或は酢、餅菓子の類にして其數枚本に違なけれども其類と清酒醸造用に較

頗るに於ては農民は疲弊せさらんと欲そと雖も勢ひこれを免る可らず然らば則ち如何にして農家の富翁を助けて其生計の度々高うするを得せしむ可きやと云ふに即ち我輩の毎度申し陳する如く養蠶を盛んにして生糸業と擴張するより他に鉛策あつみとあれども一時の方便としては種々其邊の工夫などにも非ず就中今日に米穀の輸出と獎勵し外に其販路と弘めて内に米價の維持を圖るの一策は多少効験あらんかと思はる、之に

智に富むとは云  
日本人の偏屈あ  
人の物語かと其  
○大坂京都壯士  
る二十九、三十  
對抗運動會を催  
より出立して兩  
に入りて猪玆と  
達京都は東軍大

四  
事  
事  
事

一 行 廿四 字 詣	一 行 二 十 日	一 行 三 十 日	一 行 三 十 日
自 一 行 至 十 行	十 錢	八 錢	七 錢
自 十一 行 至 卅 行	九 錢	七 錢	六 錢
三 十一 行 以 上	八 錢	六 錢	五 錢
	六 錢	五 錢	五 錢
	五 錢	八 厘	八 厘
	五 毛	五 毛	五 毛

前項にも記したる通り我國の米作反對既既往八九ヶ年の間に四十萬町歩を増加したる次第なれば假に一反の收穫高と率均一右二斗と算するも大體五百萬石の米の在り新田より全く餘分に復きたる者と云ひざる可らず日本全國の米の產量は一ヶ年凡そ三千萬石内外にして恰も其半輩を得るの感に更に新規の五百萬石と臨時に播种せたらば米の相場に關して是れ極かる可なり入九萬石の人口増殖をして隨て一方に米の需要を促しながら併しもたらんなれども之と同時に麥其他食用に供する諸種の農産物に又著しき増加もなければ新人口の需要悉く米の五百萬石を消費する者ありとは云ふ可らず以上數年の間より米を除て他の食用產物の増加比例如見るに

るの農場になかりしにせよ其く年々の豊作にて比較  
價の騰貴して農民利澤は潤ぶの見込みを明白ありと  
云はざる可らず農家の前途想遠るよ遠へざるあり  
次よ米と他の作物と反別増加の割合を比較するに米作  
の進歩亦遅々たる者に非ず「桑園反別の増加著しく  
は農人の苦す所にして今般に御三年來の調査を缺く  
雖も去る明治十四年各府縣の報告統計に據るに反別  
無處十一萬一百餘町歩にして同年全國の蘭の產額は大  
數七八百萬石なれど云へり而して昨年一昨年の蘭の  
產額は未だ今日に詳ならざれども大數一千萬石より  
看て事實に大差あるかる可しとの説もあれば暫らくみれ  
に従ひ以て之に對する桑園反別の數を概算するに多く  
も十五萬町歩を超可しとは思はれず即ち五六年前に  
凡そ四萬町歩を過めたるの調査なれば桑園其物より  
へば實に著えき進歩たるに相違なけれ其之と七八年間  
に四十萬町歩の新稻田を増加しさる割合に比較それば

明治二十一年度内國稅務收支計算帳簿ノ制ノ明治二十一年度ノ組織一據リ調理スヘシ  
明治廿一年一月廿七日 大藏大臣伯爵松方正義  
○東京府連第六號 車掌規則取扱心得書別冊ノ攝ト相定ム  
明治廿一年一月廿七日 東京府知事男爵高橋五六  
(別冊ハ別テ攝)  
○領事館書記生在勤 領事館書記生伴新三郎は在布陸ホノル、領事館在勤ト外務官高橋東一は領事館書記生に使せられ而在布陸ホノル、領事館在勤ト就も昨二十六日命せられたり  
○海底の深淺及性質と知る經驗法 マヤトヲの近傍に於て漁夫等が海底の深淺及性質と探る一種の經驗法あり其法櫛を水中に差入れ其一端に耳と充てし櫛と聞くにあり水の深さ二十呎以内なるときは點々たる響察生鹽と炭火に投するか如し五十呎なるときは懷中時計の音の如し海底の全く珊瑚質あるか又は珊瑚と泥と混るか又は砂あるかによりて音の連續に遇速わり海底空く砂なるときは響判明なり全く泥なるときは群鷺の鳴くに似たり暗夜に漁夫等は此等の試候法と用ひて其の腹場を定むると云ふ(本月四日香港ディリー・プレッス)

繁盛の由來を述  
郵船の線路を述  
に知れざりけれ  
若くばアソク  
疑ひあもしが一  
所の棗桔一朝に  
散點して薔薇た  
志て互ひに直角  
大廈高層列をな  
庭園の花卉と化  
現出し加ふるに  
れりカナダ鐵道  
贅澤品の價非常  
價開くるに隨ひ

明治十一年  
石  
同十七年

卷之三

に四十萬町歩の新種田を増加しよる割合に比較せば

くは餘なり時夜に漁夫等は此等の説教本を用ひて其の傳揚を定むる云々(本明四田番巷ディリーブルツス)

卷之三

縱合へ年月に三四四年の相違あるにもせよ農園の進歩は  
世人の喫々する如く獨り迅速意外ありとは云ふ可らず  
且つ新地の開發は獨り米作に止まるに非ずして其他穀  
穀に至るも概然らざるなし即ち前に掲げたる難穀を  
頗る增加は恰も其事實を表する者とて例へば麥作は  
別に就て之と言ふも去る十一年と十八年とと比較せ  
に前百三十六萬餘町歩に對して後は十七萬町歩と  
加し大豆作の反別も十一年には四十一萬餘町歩を  
よ十七年に進て四十四萬餘町歩に達したる等斯くて  
開地の年々歲々開け往くは況々可きの次第なれども  
に伴ふて農家全體の命脈を擡ぐ可き米の價格は獨り  
らざるのそならず却て逆行して下落の傾からんとは  
輩の聞て不間に附す能はざる所なり  
全國の人民中實地農業に從事する者は幾何なりや或  
者ハ案外多しと云ひ又或る者は案外に少からんと  
て所説勢々たりしあれども未だ調査の完備せざると  
て今日に在りても充分の統計を知る能はず唯内閣統  
局に於て近年刊行の統計書ある三府二十六縣に就て  
作の戸數人間と摘錄し以て世人が全國農作者の比例  
知るの便に供すとて新刊第六統計年鑑に之を載せた  
れ今其表を見るに總人員百に付ての農作人間は六  
三分一厘、此中專業者と兼業者との比數と率するに  
作人員百に付て專業者八十二人兼業者十八人の割合  
れば之に則して三千八百萬の人口中農作者の數を推  
察せば大體の割合は二千二百餘萬人以空く耕作に從  
事して其餘者と兼業なるを知る可し蓋し其中より專  
業者甚多く成る者も三千八百萬の半數以上は直接

○歐洲人は度量日本人の偏屈。支那は版圖大にして、ふべきもの富源の開くべきもの其豐枚舉に達せらるべれば歐米人が營利に汲々として遺利萬源を求むるに由断な況の今日彼等が商賣上に事業上に相手として目す所は唯だ此廣大なる支那にありとも云ふべ死有様して歐米各國の商人も今日は支那人と相往來するに拘らず其筆法を變じ日々の交際は勿論何か支那國內にて仕事をする時は必ず支那人を用ふる由なるが之に反して我國の商人は相變らず動もすれば支那人を輕蔑して何なる仕事を爲しにも支那人と云へば儘打無き者の如く無下に取合さるより折角斯る遺利萬源の多き國をこの前に見あがら得るべき利益とも失ふ事無と云ふ。今其一例なりと云ふを聞くに西洋人は支那内地に入り會社にても立つる時には必ず支那人を用ひ而して之を雇入るも時は千圓位の身元金を其者より預り置くを必ず節約省費の支那人あれば金の千圓位の身元金をすれば人を雇入れて仕事の出来る上に是等の金とも亦用するを掛べし支那内地に設立せる西洋人の會社いへど此等工夫は因り者なれど云ふ極めて支那人の上に於てハ身元金をば入れある事されば大體堅忍強き上又一層省費を以て事務に難處するのを彼甚だ都合う由是故か嗤だ一の例されども既に西洋人と支那と並んで人種も異なる點なれば支那人と云ふ然らずして支

○九州聯合(吉進)に開設したるが、場の都合あればばと爲さん爲め織、茶、砂糖等人の氣合を引かれば右七縣下に占め居るに迄進歩を爲し其後一層盛大に競絲の一等賞以て云へり

每日正午十二時送種痘

明  
通  
志

二月一日  
居  
高崎山 代々木村字三谷三百八十  
番地

品川彌二郎

正改新詞記事日進改良華族明覽全冊定價金六錢

17

廣雅